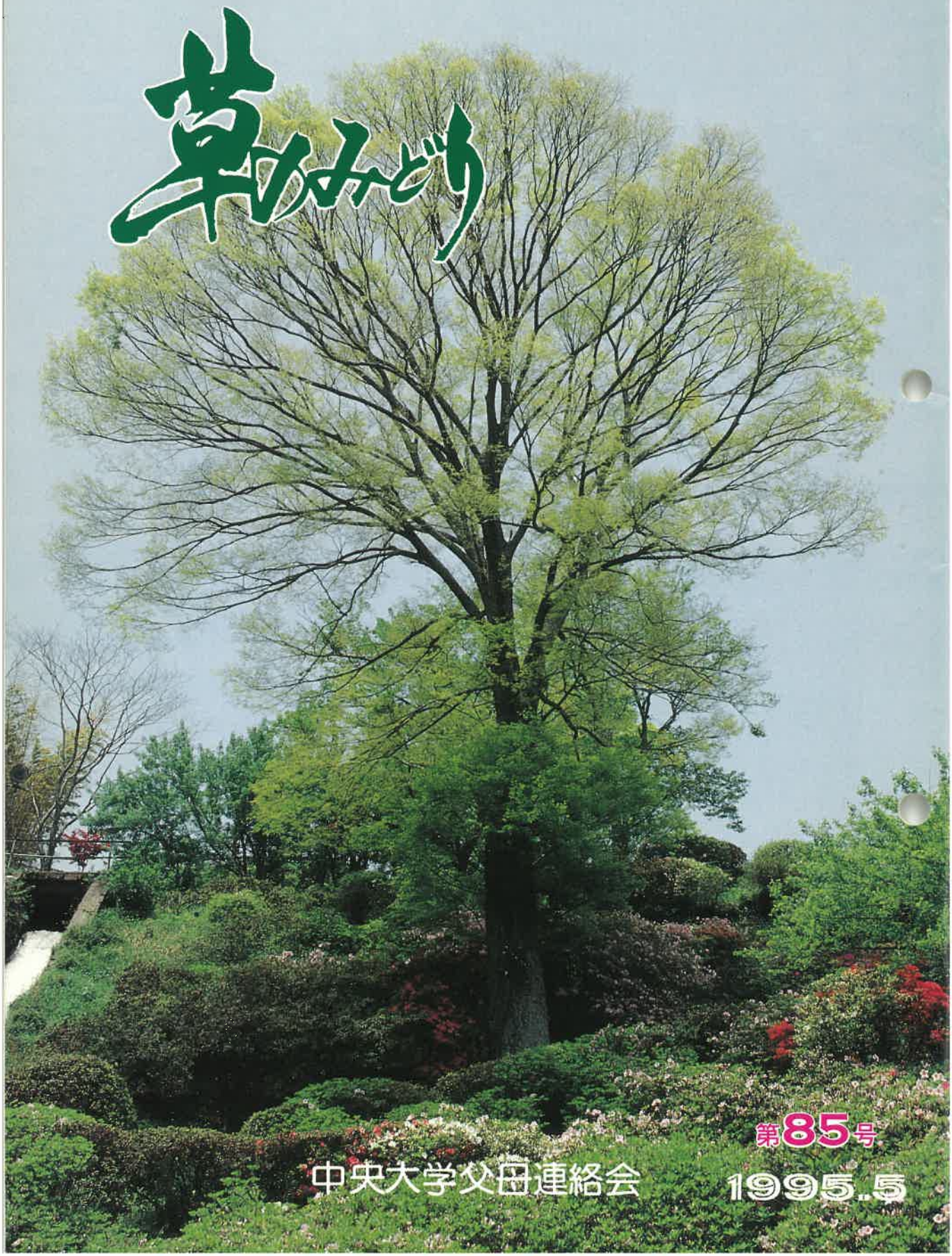
1990年2月21日第3種郵便物認可　1995年5月1日発行（毎月1回1日発行）通巻 第85号

草みどり



第85号

中央大学父母連絡会　1995.5

経済学部だより

☎ 0426(74)3311

人生のカウンターは節目節目でゼロに戻る

経済学部教授　中川　洋一郎

フランスでの二年弱の在外研究を終えて帰国した。驚くべきほど強烈かつ執拗な「日本限界論」の大合唱である。確かに、日本のシステム自体が問い直されている。

もちろん私にしてからが日本のシステムが最善であり、完全無欠で無誤謬だなどとは思っていない。しかし、世界の大勢は、好むと好まざるとにかかわらずジャパナイゼーション（日本化）にある。「日本化」とは、私に言わせれば、何かを評価するのに、過去の実績を「積み上げる」のではなく、現時点での価値ではかるところにある。教育制度も例外ではない。

フランスの教育制度は、エリート養成に主眼が置かれている。しかし、その最大の特徴は評価基準が「積み上げ方式」である点だ。小学校六年生の段階で、人生航路を決定づける大きな試験がある。ここでその試験に合格すればエリートとして生き残るチャンスが生まれ、不合格であればノン・エリートに分類される。その後の人生において彼らはこの小六テストを皮切りに徐々に選別結果を積み上げていって、いわばその総得点で人の値踏みを行う。過去の高得点がそのまま残る積み上げ方式だから、敗者復活の可能性はごくわずかしかない。早い段階での選別という点では、ヨーロッパ諸国は基本的に同じシステムを採用している。

将来的にエリートのチャンスが与えられた子どもはよい。そのつもりで育てられるから、確かにエリート然とした立派な風采のエリートたちが上層階級を占め、権力と富と栄誉を我がものにしている。日本でも、角界などでは二〇歳そこそこの若造たちが、強ければ、まわりから「横綱、横綱」とか「大関、大関」とちやほやされて美女まで手に入れて（年上だが）、甲斐甲斐しい世話を受けるから、それなりの風格が自然にできてくる。しかし、最初の試験で失敗してノン・エリートの烙印を一二歳で受けた子どもたちは何を拠り所に生きていけばよいのか。

フランス人から「日本のシステムの特質を一言で述べよ」と問われると、私は「日本では、人生のカウンターは節目節目でゼロに戻る」と答えてきた。フランスと比較するとその特質がよくわかる。

例えば、わが中央大学経済学部に入学された新入生の皆さんはいろいろな高校のご出身である。各県での最高レベルの高校を出た新入生もいれば、失礼ながら各県では三流といわれる高校のご出身の方もいらっしゃるかもしれない。しかし、ひとたび大学に入学されたら、大学で何をどのように学んで実力を付けるかという点が決定的に大事なのである。出身高校のレベルはすべてご破算である。つまり、新入生は皆「カウンターをゼロに戻して」、同じ水準から出直していただく。

日本の企業も同じである。確かに入社に際しては、残念ながらまだ大学間で格差を付けるようであるが、ひとたび入社してしまえば、いかなる仕事をできるか、したか、これが大事。出身大学は関係なくなる。新入社員は皆「カウンターをゼロに戻して」、そこから皆一斉に競争するのである。

昨今の日本企業の新しい人事方針は、年俸制の導入や能力給の比率上昇にある。この変化は、過去がどうだったのか（つまり「積み上げ方式」）ではなく、今、何ができるかという点に評価の重点を移行させるのだから、これは私に言わせると日本企業の人事システムの一層の「日本化」である。「人生のカウンターは節目節目でゼロに戻る」どころか、「毎日ゼロになる」のである。

いやはや、大変な時代になった。